

アンワル元副首相を逮捕 (2008.7.16)

アンワル逮捕・保釈の裏側

伊賀司

(神戸大学大学院)

おとといから昨日にかけてのアンワル逮捕から保釈の一連の報道はビックニュースだが、実際のマレーシア政治へのインパクトはそれほど大きくないのではないかと私は考えている。つまり、前回 1998 年にアンワルが逮捕礼状なしで容疑者を拘束することのできる国内治安法で逮捕されたときと比べると、既に「死に体」になりつつある今のアブドゥラ政権の側には、事態を大きくする力も、意思もないだろう。

アンワルの側は警察の取り調べに不満を述べているが、とりあえず、手続きに沿って逮捕と保釈が行われたといってよい。1998 年のときはマハティールがアンワルの政治生命を完全に亡きものにしようとする意思を持ち、どんな非難を受けても動じる気配を見せなかった。今回のアンワルの逮捕をめぐる一連の動きは、1998 年のときのような致命的なダメージを与えるような意図には基づいていないと思う。

今回のアンワルの逮捕にまで至る一連の動きは、(1)アンワルの同性愛疑惑を再び持ち出すことで(マレー人を中心とした)従来の与党支持者の離反を食い止めることを狙った、(2)ナジブ副首相とその妻がモンゴル人女性通訳殺害事件に関与したとされる報道に対し、それへの対抗上アンワルの同性愛疑惑を持ち出した、という 2 点が考えられる。

アンワル支持者からなる野党・人民公正党(PKR)のコアな支持者については同性愛疑惑を持ち出すことは、逆に支持者の勢いを増すことになるのだが、問題となるのは現在、与党と野党支持の間で揺れている「サイレント・マジョリティ」の側であろう。今月はじめに行われた石油値上げ反対デモ集会に出席するような野党のコアな支持者に対して、一般の国民の多くは与党政治に対して不満を持っているものの、未だ野党への政権交代には不安があると思う。3 月の総選挙では野党が大勝したために、国民が積極的に野党の側を支持したようにも受け取る向きもあるようだが、恐らくそれは違っているだろう。私が 3 月の選挙の際、現地で見聞きした限りでは、「アブドゥラが頼りない」、「アブドゥラが 2004 年の選挙で約束したことを守れずに

改革が後退している」といったアブドゥラ本人の指導力や政権運営への不満が大きかったように思う。3月の選挙では与党の政党マシンを構成する人たちがぼろぼろとこぼれて野党側に寝返っていったようだが、それも「今回だけは与党に投票できない」という人たちが多く、アブドゥラの指導力に疑問を呈する人はいるが、与党政治に依然として未練がある向きが強かったと思う。

したがって、こうした与党政治に未練を持っている有権者たちを野党側がひきつけるには、既に「死に体」となりつつあるアブドゥラよりも次の首相となるはずのナジブの信頼性や指導力の欠如を露呈させることで彼を引き摺り下ろし、ポスト・アブドゥラの与党政治も信頼できないことを強くアピールする必要がある。野党側がモンゴル人女性通訳殺害疑惑をとりあげ、仕掛けていったのもこの文脈において考えるべきである。それに対抗する形で、ナジブの次に首相の座に近いアンワルへの個人的な性癖の疑惑を問題にしたのが与党側であったといえよう。■